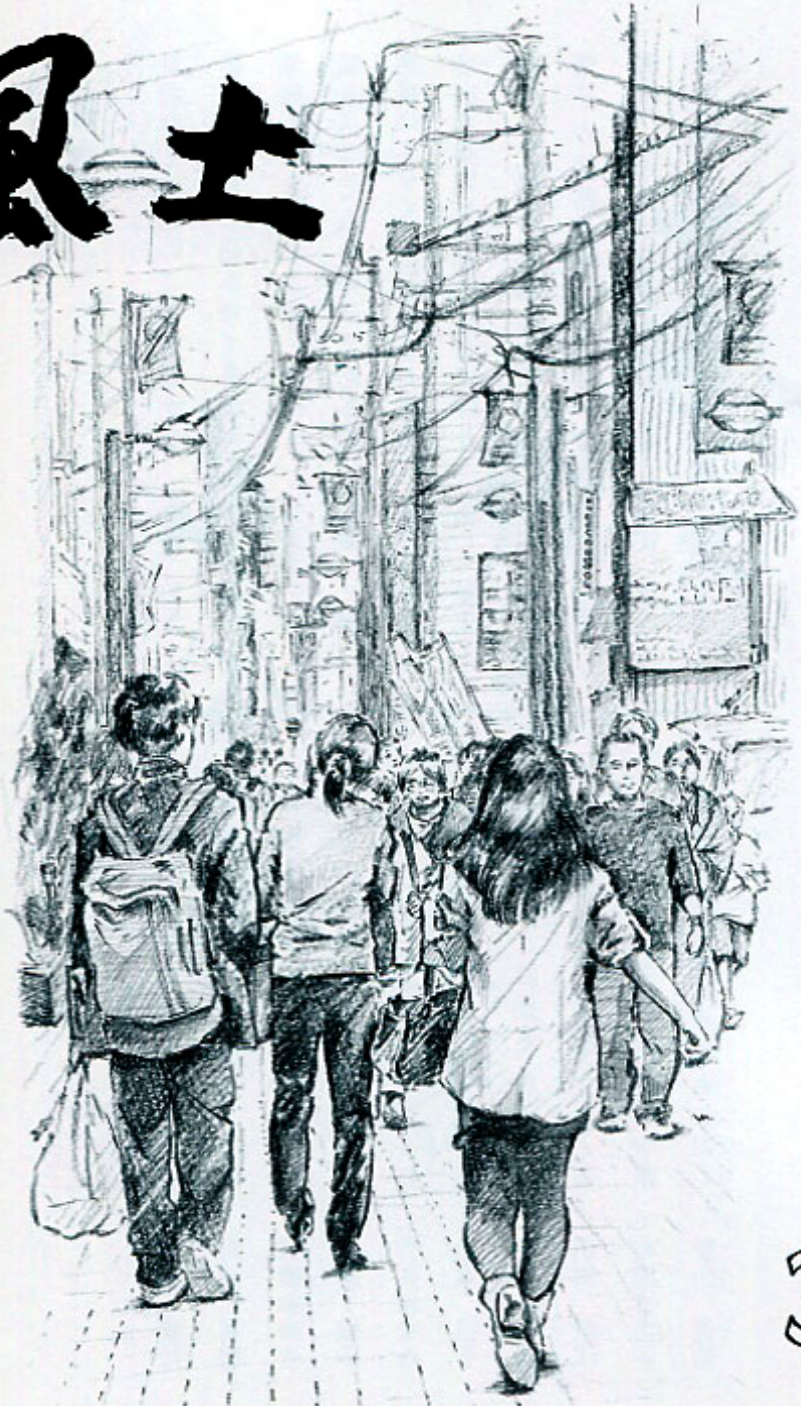
昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻3月号(通巻620号)

風土



3

水仙花

神蔵器

寒林の真只中に時計巻く

あをあをと青岱墨や淑気満つ

亡きひとの白侘助や筒咲きに

薄氷の刃のごとし山廬かな

葱抜けば明日の香り怒濤なす

PDF= 俳誌の salon

寒満月大東京をてのひらに

窯出しに貫入走り三十三才

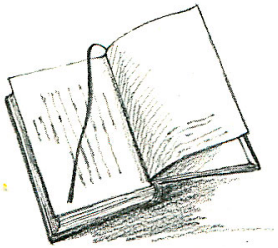
風花や円覚寺より建長寺

一本の燈台となす水仙花

立春の仏の指の外へ反り

豆打つや南南東を恵方とす

仙崖の○の結べり寒の明く



PDF= 俳誌の salon

竹間集

同人作品

蜜柑売　島谷　征良

穭田のみどり濃くなるばかりかな
菊月の定まりがたき日和かな
行く秋や何をたつきの一軒家
神の旅日暮れてよりの寒さかな
蜜柑売蜜柑の山を背に負ひて
木の葉髪ましろに母のお健やか
神が地を掃くがごとくに時雨かな

年の瀬　大竹　淑子

地にかへるやすらぎにある落葉かな
冬鵙やマリア灯籠胸薄し
寺の児のひとり遊びや石蕗の花
短日や戸板に売つて市のもの　〔京都・錦市場　四句〕
空也忌や水に生牡蠣放たるる
奥の灯に赤金打ちて年つまる　〔「有次」刃物店〕
年の瀬や九条・堀川・聖護院

冬薔薇　宮川　みね子

麦の芽や襞の深まる駒ヶ岳
剝落の小さきほとけや笹子鳴く
冬薔薇のくれなゐ空の青さかな
水鳥のまつすぐに曳く光の尾
ポケットの手の温もりや花八ツ手
年の暮ワインのコルク抜く音も
すり減りし竹の箒や日短か

PDF= 俳誌の salon

煤逃げの　　浜　福恵

銀杏散る与謝野晶子の帽子かな
塔聳ゆ雪来る前の碧き空
壁炉燃ゆ静けさに人信じをり
江に帰る夕日の色の海鼠舟
枯れに入る蓬萊の野の明るさよ
冬虹の奥へ西国札所みち
煤逃げの飄と戻り来頃なれど

冬の雲　　鈴木とおる

眠りつく山二つ越え子を見舞ふ
水鳥の人を見に来る狢池
一と冬をここに棲む気の浮寝鳥
近道を下れば大名葱の里
物書きの妻は寂しき漱石忌
セーターに老眼鏡の巻き込まれ
丹沢に生まれ相模へ冬の雲

鏡餅　　外川　玲子

寒波くるしづかに夫の忌なりけり
汲み置きし厨の水や去年今年
村百戸のみこんでゐる雪浅間
水鳥の意志もつ空の蒼さかな
一茶忌や村ぢゆうの水美しき
白菜の四つ割にして売られけり
ひとり家に端然とあり鏡餅

春近し　　山田　暢子

富士山を観るだけの旅冬帽子
ポインセチア珈琲カップ一つ置き
木洩れ日に枯木の匂ふティルーム
枯れきつて木々たちは空切り展く
干大根海を隠してしまひけり
本籍はまだふるさとに木の葉髪
自転車に電話番号春近し

PDF= 俳誌の salon

寒の色

―大竹　淑子―

丹後・荒井崎　九句

日の幅に沖のきらめく船起

舫綱締めて船霊祭かな

寒晴れや松の名残りに大漁旗

寒風や鳶の高舞ふ子の日崎

鳶の崎寒の肋骨雲の出て

冬天へ出漁の船の火を焚ける

棹と手網船に束ねて寒潮へ

鰤敷綱の海へ太古の溶岩なだれ

寒潮や屏風畳みに溶岩の岬

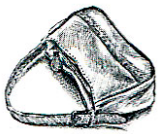
舞鶴市・三浜

大海の沖より陸へ飛雪かな

PDF＝俳誌の salon

山河集

同人作品



神蔵器選

賀状書く燠火のごとき縁かな　小林　和子
キャンパスに言伝てのごと朴落葉
着膨れてカードで通る改札機
舞ふほどに神に近づく里神楽
鰤豊漁男声に交じる女声

浅漬を買ふや真つ直ぐ帰途につく　柿沼　盟子
教会に残る町の名冬もみぢ
寒菊の垣より出づる日和かな
下足札渡し勘定枇杷の花
蔵王堂へ注ぎ込みゆく冬銀河

一茶忌の信濃は雪となりにけり　近藤幸三郎
寒晴れの生簀に泡の一つ浮く
初春の雲へ分け入る鳶柱
八つ手咲く京の町屋の片泊り
木彫り鷹出羽三山の雪を呼ぶ

粥薄く仕立てることも漱石忌　内藤　静
山眠るそこに眠れるもの抱き
本尊は秘仏におはす冬木の芽
またの名をお会式ざくら冬桜
咳き込みて人を離るる忍冬忌

冬の靄晴れゆく天守無き城址　直井たつろ
寒林に入りて一樹となりたき日
寒鴉虚空を繋ぐ声放つ
パレットに無き色見せて冬紅葉
備長炭鉄の音して寒旱

PDF= 俳誌の salon

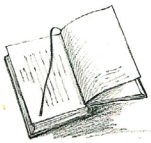
雪国

伊藤　紫水

店頭に番号のある酉の市
山彦を集めて山の眠り落つ
手鏡に面を写して里神楽
擬宝珠の橋通り過ぐ青邨忌
節穴を棒のごとくに冬日差
いつからか我の後ろに雪女郎
地響を立て山峡の除雪車くる
学問の神に刻かけ初詣
雪国は純白のほか省略す
生涯を雪国に住む雪達磨

PDF= 俳誌の salon

風土独語／神蔵　器



蔵王堂へ注ぎ込みゆく冬銀河　　柿沼　盟子

澄みわたった真冬、満天の星がきらきらと輝く中、一際あざやかに真砂を散らしたごとく小さな星が何億、何千万と集まって大河を形成した冬銀河が、吉野の上空を流れ、蔵王堂の黒々と聳える大屋根の上に降りかかっている。

蔵王堂は今まで三度の火災にあうが、強い信仰によって現在の建物が天正二十年に復興した。奈良東大寺の大仏殿に次ぐ、大建造物だそうだが、蔵王堂は金峯山の高台に建っているので、東大寺の大仏殿に勝るとも劣らないように見受けられる。入母屋造り、檜皮葺きの高さ三十四メートルの大屋根は豪壮、且つ荘厳な建物である。

冬銀河は蔵王堂へ「注ぎ込みゆく」という具象を得て、はじめて大景を見事にいきいきと表現出来た。そしてこの句の背後に〈歌書よりも軍書に悲し吉野山〉、南北朝時代のさまざまな悲話などがよみがえって来る。作者の代表句ともなろう。

「イマジン」の流るる十二月八日　　竹久みなみ

「イマジン」はジョン・レノンが作詞作曲し、そして歌い、爆発的人気を得て、全世界を感動の渦に巻きこんだ。

想像してごらん
天国なんて無いんだとほら
簡単でしょう？
地面の下に地獄なんて無いし
僕たちの上には　ただ空があるだけ
さあ想像してごらんみんなが
ただ今を生きているって……。

人類の平和を願ったけれど、悲しいかな三十年を経ても、なおイマジンの願いは届かない。でも、きっといつかは、必ず届く筈である。いつかは、いつかはイマジンは永遠に問いかける。

十二月八日はジョン・レノンの忌日である。いま静かにジョン・レノンのブームがおきている。

作麼生を僧に語らば咳一つ　　天野みゆき

作麼生（そもさん）を僧に語らば咳一つ　天野みゆき

作麼生は中国唐末以降の口語、日本では禅宗で、問答の際に用いられた。

麻浴山宝徹禅師（まよくざんほうてつぜんじ）、あふぎをつかふちなみに、僧きたりてとふ、「風性常住、無処不周（むしょふしゅう）なり、なにをもつてかさらに和尚あふぎをつかふ」。

師いはく「なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず」と。

僧いはく「いかならんかこれ無処不周底の道理」。

PDF= 俳誌の salon

ときに、師、あふぎをつかふのみなり。

僧、礼拝す。（正法眼蔵より）

作者みゆきさんは八十五歳、菩提寺の住職に生死に関する大事でもお尋ねされたのではなかろうか。するとそれまで磊落に話をしていた住職は少し居住いを正し、合掌した手に「ごほん！」と一つ咳をされたのみであった。（以下略）

PDF= 俳誌の salon

風土集

神蔵器選

転がりて空を余して冬の雷　上尾　根岸善行

新雪の富士くれなゐに匂ひたつ

ストーブの凹凸の音深夜かな

雨雲にのしかかられて鳰

煤払ふ欲出できたるところかな

焼諸を頬張り四条東詰　京都　西村雪園

むし寿司の湯気立ち上り年暮るる

年の瀬や花麩も並ぶ錦市

行く年やからくり神籤中の吉

冬満月黒塀つづく柊家

冬椿繕ふことは言はざりき　相模原　天野みゆき

綿虫の漂ふ結界はつかに日

ドラマ「坂の上の雲」

子規の死をみてゐて背筋寒きかな

作麼生（そもさん）を僧に語らば咳一つ

長作観音

玉抱く子授け観音冬ざくら

ひとつ得て日月硯や笹子鳴く　福生　雨宮桂子

三斎市六斎市や年詰まる

初雪やあををとして千木の天

包帯の指動き出す師走かな

待つことに慣れて御陵のかいつぶり

ウインドー一つ飾りてクリスマス　東久留米　竹久みなみ

「イマジン」の流るる十二月八日

ＭＲＩ地下工事の音十二月

年の暮弁財天の亀の首

青空の中より雪の生まれけり

着ぶくれて旅の初日の高山寺　川崎　山本浪子

かはらけを投げ尽したり冬の山

海鼠喰む湖北の風に吹かれ来て

一山は御神体なり霜柱

月光の深雪の底の千曲川

PDF= 俳誌の salon